

事例1：小学校2年生 保健室で元気を取り戻したA子

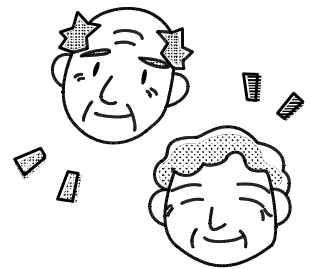


A子は、小学校2年生の9月ごろから「頭が痛い」、「お腹が痛い」と言って頻繁に保健室に来るようになった。徐々に登校をしぶり始め、母親が学校まで送って行っても教室に入れなくなった。そこで、養護教諭は担任と連携を図りながら、保健室でA子に積極的にかかわり、教頭は保護者と教育相談を行い、A子は元気を取り戻し、11月に学級復帰をすることができた。

周辺の状況

両親と祖父母、妹の6人家族。雑貨店を家族で経営しており、保護者は忙しい毎日を過ごしている。食事をしたり、旅行をしたりして、家族で過ごすことも少なかった。

A子は、おとなしく一人遊びが好きで、両親や祖父母に面倒を掛けない子どもだった。妹は活発で、姉に比べ両親や祖父母のかかわりが多かった。登校しぶりは小学校2年生のこのときが初めてで、家族は原因やかかわり方が分からず、心理的に不安定な状態だった。何とか登校させようとして、母親はしきったり、突き放したりして、A子はパニックを起こす状態になっていた。



児童理解

何かと忙しい両親を見て育ち、両親に心配を掛けまいとして一つ違いの妹の面倒を見たり、保護者の言うことに素直に従ったりしていい子を演じてきた。母親や祖母が妹をしきったり指示したりすることを内心うらやましく思いながらも、自分にもかかわって欲しいと言えずに我慢していた。学校でもいい子を演じ、友達とのトラブルも無く過ごしていたが、A子の抑圧していた母親への愛情欲求が息切れしたように表出し、母親との分離不安を起こしたものととらえられる。

指導・援助の方針

(セ)は、県総合教育センターの援助 (学)は、学校での指導・援助

- 1 担任や養護教諭を中心とした校内支援体制を確立する。(学)(セ)
- 2 母親と一緒に保健室登校ができるようにする。(学)
- 3 砂遊びや動物遊びを通してA子の感情の表出をさせる。(学)
- 4 保健室でのA子と学級の児童の関係づくりを意図的に推進する。(学)
- 5 担任は、A子が学級へ復帰できるように誘い掛けをする。(学)

< 指導・援助の経過 >

1 校内の支援体制の確立

担任からA子の登校しぶりについて報告を受けた教頭は、校長に報告をするとともに生徒指導係に知らせ、緊急にA子に対する支援体制について話し合うようにした。まず、教頭は担任と教育センターにどのような支援体制が良いのか、助言を得るために出向いた。その後、生徒指導係会で助言を参考にし、学校の実状を踏まえ具体的な指導・援助計画で話し合い、次のように実践することにした。

< 担任 >

養護教諭と連携を図りながら、A子との信頼関係を一層深めるようにする。また、A子への指導・援助の方針について保護者に説明をする。

< 養護教諭 >

担任と連携を図りながら、保健室でA子の心を開放させ、元気を取り戻していくようにする。

< 教頭 >

相談室で、母親に対して受容的に話を聴き、精神的に安定させるとともに周辺の状況等の情報を集める。教育センターとの窓口になり、A子の状況の変化を報告し、対応の仕方について助言を得る。助言を基に、担任等に連絡をし、保護者には家族関係等の改善を図ってもらうように依頼する。

< 生徒指導係 >

全教職員が共通理解・実践できるように、職員朝会で説明をする。また、事例研究会で、A子の状態に対する理解を図り対応の在り方を検討する。

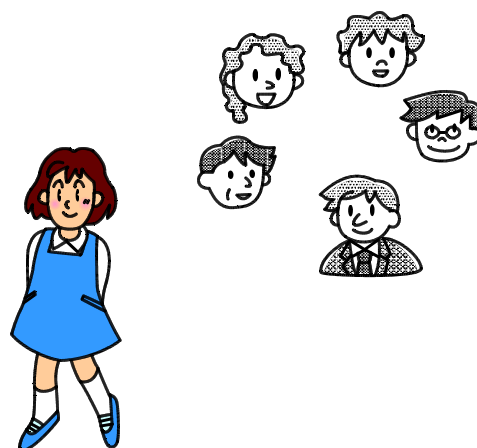
2 保健室登校への誘い掛け

担任は、保健室に登校してもよいことをA子に伝え、安心して登校できるようにした。また、教頭は母親に、A子が休みたいと言えば休ませ、母親と一緒に来て過ごしてもらうなどして、母親といることでA子の心の安定を図るように依頼した。養護教諭は、登校をしたA子の訴える身体の症状に対応し熱を測ったり休養をとらせたりして信頼関係をつくる

< ポイント >

① 不登校は、早期に対応すると改善される可能性が高い。担任は自分の指導の失敗などと思われたりしないかなどと考え、一人で抱え込んでしまうことがある。そのため、対応が遅れ、不登校の改善を困難にしていることもある。登校しぶりなどのサインを発している時点で担任が、管理職や生徒指導係などに報告し、早期に校内の支援体制を確立することが大事である。

A子については、登校しぶりの段階で校内の支援体制が確立され、早期対応ができたことが早期改善につながった。



② 教室は不登校の子どもにとって最も抵抗感が大きい場所である。保健室や校庭や特別教室など比較的抵抗の小さい場所から徐々に居場所を広げていくことが大事である。保健室等を受容的な雰囲気にする事で子どもの緊張感を和らげることができる。そして、保健室等が安心できる場所になると、保

ようにした。A子は徐々に養護教諭に信頼を寄せるようになり、母親が送ってくれば保健室で一人で過ごせるようになった。

また、生徒指導係は校内事例研究会で、A子の事例を検討し、全教職員で共通理解して実践できるようにした。

3 A子の心の開放

養護教諭がA子の希望するスポーツをしたり、動物遊びや砂遊びをしたりして一緒に過ごし、A子の心の開放を図った。また、保健室の掲示物の作成やそうじなども手伝ってもらい、達成感を感じることができるようにした。養護教諭が不在のときは、できるだけ対応できる教員を当てたが、できない場合は、A子の計画で自由に本を読んだり、絵を描いたりして過ごさせた。養護教諭との信頼関係が深まり養護教諭と一緒にあれば、保健室以外の場所にも行けるようになった。

また、担任はA子の対応に苦勞をしている母親の思いを受容・共感し、「焦らずに長い目で見ていきましょう」と言葉掛け等をして、一緒に対応していく姿勢を見せるようにした。そして、教頭はA子の描いた絵画を通して、A子が家族での団らんを望んでいることを伝え、週に一回でも家族一緒にの食事をしてもらうように依頼した。母親がA子の気持ちを受容した態度で対応することで、家庭においても感情を表出することができるようになり元気を取り戻してきた。

4 人間関係づくり

担任は、休み時間等を利用して保健室に行き、一緒に遊んだり学習をしたりして過ごした。また、仲の良い子どもたちと保健室で給食をとらせたり、休み時間に子どもたちを遊びに行かせたりして、A子の状態を見ながら学級の子もたちとの交流ができるようにした。最初、A子は表情が曇っていたが、自分から友達にかかわろうとする態度が見え始めてきた。そこで、担任は学級の一員であるという連帯感をもたせるために、「朝は、学級の友達にあいさ

保健室等だったら母親がいなくても過ごせるようになる。

A子については、養護教諭がA子の訴える症状に誠実に対応し、登校しぶりや学習のことなどに触れないようにしたことで、信頼関係づくりができ、保健室登校への誘い掛けに応じることができた。

③ 心の開放を図るためには、自分で好きなものを選んで実行できる喜びを感じさせ、充実感を感じるようにすることが大事である。また、身体の緊張をほぐすことは、心の緊張もほぐすことになるので、身体を使った遊びなどが効果的である。

A子については、動物が好きで飼育舎の中でウサギを抱いて遊んだり、砂遊びをして砂の感触を感じたりして心の開放がなされ、緊張感がほぐれ、感情の表出がスムーズにできるようになった。



④ 保健室等で安心して過ごせるようになると、友達や担任との関係を深める段階となる。担任は学習やお知らせのプリントを届けたり、子どもの様子を養護教諭に聞きに行ったりして、子どものことを気に掛けていることを感じさせるようにする。また、学級の子もたちと交流をする機会を計画的にもち、人とのかわり合いのスキルを練習するようにさせることが大事である。

つをしてから保健室に行ってはどうか」と言葉掛けをした。それからは登校したらまず学級の友達にあいさつをしてから保健室に行くようになった。A子は、休み時間にも校庭で友達と遊ぶようになり、友達の「次は体育だよ、一緒に行ってしよう」との言葉掛けで、体育に参加するようになった。

5 教室への誘い掛け

担任や養護教諭はA子の気持ちが学級に向き始めたことを感じたので、少し教室への誘い掛けをすることにした。養護教諭は、あらかじめ担任に時間割を聞き、A子に「先生が付いて行くから参加したい授業があったら言ってね」、「学習発表会の練習に行ってみようか」などと言葉掛けをした。A子は嫌がる様子もなく、養護教諭と学習発表会の練習に参加した。養護教諭や担任は学習に参加できたことを褒め、自信付けを行った。そのあと、A子は養護教諭と一緒に、音楽と体育に参加し始めた。

学習発表会に参加することができたことで自信が付いたのか、これを機に学級に復帰し、養護教諭がいなくても授業に参加できるようになった。

A子については、担任や学級の友達との関係が深まり、精神的に安定したときに友達の言葉掛けがあり、養護教諭のいない場所でも活動できるようになった。

- ⑤ 子どもの気持ちが学級に向き始めと、周囲の者はすぐにでも教室に復帰できると考え無理な課題を要求してプレッシャーを与えがちとなる。そうすると子どもは、その要求にこたえようと無理をして疲れてしまい、元の状況に戻ることもある。保護者に子どもの状況を見て、ゆっくり働き掛けていくことを理解してもらい、子どもの気持ちにブレーキをかける位の気持ちで対応した方が良い。

A子については、担任・養護教諭や教頭が教育センターとの連携を図り、A子の状況による見極めをしながらスモールステップで対応したことで、順調に学級への誘い掛けができた。

A子の様子の変化

- 1 A子は、おとなしく自己主張をするような子どもではなかったが、保健室登校を経験してから、積極的に友達とかかわるようになり、リーダー性が発揮できるようになった。
- 2 腹痛や頭痛を訴え頻繁に保健室に出入りしていたが、現在は保健室に来室することはない。
- 3 妹と対等に喧嘩できるようになり、家庭でも活発さがでてきた。

その後の対応

- 1 A子が教室で安心して過ごせるように、担任は仲の良い子どもとペアを組ませたり、グループも比較的仲の良い友達とつくらせたりするなど配慮するようになった。
- 2 教職員全体で目配りをしてA子についての情報交換を行うなど、担任へのサポートを継続した。また、担任はA子に対して言葉掛けをしたり褒めたりして継続した自信付けを行い、学級での居場所が確保できるようにした。
- 3 教頭は教育センターに電話でA子の状況を報告するとともに、今後の対応について助言を受けた。その助言を基に事例研究会でA子の今後の支援体制の在り方について話し合った。

主なポイントの応用

ポイント① 学校での早期発見のポイント

1 登校状態

- ・ 特定の教科がある日に欠席が多くなる。 ・ 朝，トイレに入ったまま出てこない。
- ・ 休日の翌日や月曜日など欠席が多くなる。 ・ 朝，友達が迎えに来て顔を出さない。
- ・ 遅刻・早退が多くなる。 ・ 朝になると頭痛，腹痛，発熱，吐き気などを訴える。
- ・ 朝食，着替え，トイレ，時間割そろえなどに手間取る。 など

2 学習態度

- ・ 授業中ぼんやりとしている。 ・ 成績が下がる。
- ・ 授業中に保健室によく行く。 ・ 教師を怖がる。 など

3 担任との関係

- ・ 担任にべたべたとしたがる。 ・ 小さな傷でも大げさに痛み見せに来る。
- ・ 担任にしかられたと言って登校を嫌がる。 ・ 担任を避けるようになる。 など

4 友達との関係

- ・ 友達にからかわれる。 ・ 孤立して友だちがいない。
- ・ 年下の子どもと遊ぶ。 ・ 友だちの好き嫌が多い。 など

県総合教育センター『研究紀要』100号 P55 早期発見のチェックリスト参照

ポイント②③④ 保健室等での指導・援助の在り方

児童生徒がありのままの自分を表現しながら，自分の気持ちを整理できるように促す。（自己受容，自己表現）

絵，読書，パズル，粘土，砂遊び，編み物
手芸，コラージュ（貼り絵），折り紙

自分で計画を立てて，実行するように促す。成就感，達成感を体験できるようにする。（自己決定）

学習：教科を決めて授業を受ける
保健室以外の場所に行く

人間関係づくりを図る。

（コミュニケーションスキルの獲得）

養護教諭と2人で（対話・手伝い・遊ぶ）

担任と2人で（対話・学習・遊ぶ）

友達数人で（遊ぶ・給食・交換日記等）

心と身体に休養をとらせる。

マッサージ ストレスマネジメント

ベッドや椅子で休む，小動物と遊ぶ

リラクゼーション・トレーニング^{（注9）}

（注9）リラクゼーショントレーニング：身体的・精神的リラックスを生じさせる目的で，体操，ヨガ，禅，暗示，イメージ，随意筋の緊張－弛緩などを行う。